

早瀬晋三著

『海域イスラーム社会の歴史
——ミンダナオ・エスノヒストリー——』

岩波書店 2003年 xx+265ページ

すずき のぶ たか
鈴木 伸 隆

I 本書の問題意識

本書は、東南アジア東部に位置するイスラーム海域社会を対象として、イスラーム化、ヨーロッパ諸国との交易、さらには今世紀に至るまでの植民地支配の歴史を記述した論集である。副題には、ミンダナオ・エスノヒストリーとあるが、議論はフィリピンのミンダナオ島に限定されていない。海域社会の特徴である移動性、流動性、可動性に着目するならば、フィリピンという国名をつけ、議論を限定すること自体、ミンダナオ島に生活する人々の歴史が本来持っていた広がりやを矮小化してしまうことになりかねない。その意味で、本書は海域社会の復権を狙いとしていることが、副題からうかがえる。

本書全体を貫く問題関心は、少なくとも3つある。まず第1は、戦後アジアにおいて誕生した近代国家を枠として、歴史を語ることへの懐疑である。近代的な産物である国を単位にした場合、当然のことながら過去の人々の生活は記述上、分断されることになる。著者は、そうした問題を乗り越え、「もっと『大きな歴史』を描く必要性」(vページ)を感じ始めている。第2は、従来の文献史学に対する懐疑である。著者はどうやって「文献史学で十分に語れない地域や民族の歴史を語るができるのだろうか」(xiiページ)という真摯な問いを発しているように、文献に基づく実証的な研究を否定しているわけではない。むしろ、文献が孕む制約や限界を十分に認識しながら、史料に登場しない社会の歴史を、どのようにすくいあげればいいのかと、文献史学に

内在する方法論上の問題点に直面し、苦悩している。第3は、歴史研究に根強い陸地中心史観の限界である。陸を前提に歴史を語ることは、海域社会が持っている可動性や流動性を見落とす可能性を孕んでいる。対象とする海域社会の人々は、文字によって自らの歴史を語ることを選択しなかった。それゆえ、文献という史料を後世に残すことはしていない。そうだとするならば、海域社会の記述は、文字を選択した陸地社会の人々による記述の断片に垣間見ることができる姿を、再構成することによってのみしか成立しないことになる。

以上のように、今日の歴史学が直面する諸問題に対して、著者が本書で目指そうとしているのは、文献による実証的な研究の限界性を十分に認識したうえで、国家という枠に縛られない、戦争や紛争といった非日常的な世界から解き放たれた「大きな社会」(viページ)を記述することにある。従来型の文献史学に対する、新しい記述への挑戦でもある。その作業仮説として、著者は1つの枠組みを提示する。それは、東南アジア東部の海域イスラーム社会を1つの歴史的地理的世界として認識することが妥当であり、しかもイスラーム化による影響は土着の社会制度である首長制を根本的に変革するには至らなかった、というものである。この仮説を立証するため、第I部は3つの王国、あるいは社会を対象とする。第1章ではイスラーム教の受容によって、発展した政治体制を形成したマギンダナオ王国、第2章では複数の自然集落から構成される小国群であるサンギル社会、第3章は外来からの宗教の受容を拒んだバゴボ社会である。第II部では、異なる発展を見せてきた社会が、国民国家の中に包摂され、マイノリティ化させられる過程に注目している。本書の構成は、以下のとおりである。

はしがき

序章 海と川と森のなかの首長制社会

第I部 海域イスラーム王国群の形成

第1章 歴史的地理世界としての海域イスラーム

第2章 マギンダナオ王国の成立

第3章 サンギル小王国の林立
 インターロード（幕間）
 第Ⅱ部 海域イスラーム社会の衰退とマイノリ
 ティ化
 第4章 ミンダナオの近代
 第5章 ダバオの社会変容——フロンティアの
 形成——
 おわりに

Ⅱ 本書の概要

それでは、各章の概要を説明したい。まず第1章では、ブルネイ、テルナテ=ティドレ、マカッサル、マギンダナオ、スルーという5つの王国が、「商業の時代」と呼ばれるヨーロッパとイスラーム商人との交易の過程で、イスラーム教を受容し、「海の領主」として発展していく様子を説明している。従来、イスラーム教の受容によって、東南アジアの社会は階層化した高度な政治秩序を形成することに成功した、と一般的に理解されてきた。しかし、著者はイスラーム化の影響をことさら強調することは避け、「それぞれの王国は、首長制社会を残したままで、スルタンなどの個人的なカリスマ性によってのみまとまった行動をとった」（30ページ）と述べている。すなわち、王国という体制を整えてはいるものの、イスラーム化と共存しながら「首長制の独自性」は温存された、と結論づけている。

第2章は、マギンダナオ王国の成立について述べている。マギンダナオ社会は、イスラーム教の受容によって、スルタン制「国家」という高度な政治組織へと発展することが可能となった。著者はイスラーム化の影響を十分認識しながらも、支配構造の二層化に注目し、イスラーム化そのものが、既存の社会構造を破壊することなく、その上により高位の政治制度を伴って王国が建設された、と説明する。さらに、スルタン制「国家」建設が、経済力、軍事力、血縁、領土、宗教という5つの領域でもっとも顕著に見られ、その一方でマギンダナオの人々は、イスラーム教徒という自己認識を、スペインによる戦いの中から感じ始めていた、と述べている。

第3章では、マギンダナオ王国とは異なり、サンギル小王国においては、15世紀ごろから首長国が林立したものの、首長制から大きく脱した政治組織を形成することはなかった、と結論づけている。サンギル人は今日、フィリピン・ミンダナオ島ではイスラーム教徒、インドネシアではキリスト教徒と、異なる歴史的な経験により、民族的な同一性を維持するには至っていない。しかし、これまで国ごとに分断されて理解されていたサンギル人を1つにつなぎ合わせ、視野に入れて議論することで、サンギル人社会の特殊性を浮かび上がらせている。後半では、サンギル諸島に伝わる口頭伝承に着目し、マギンダナオのスルタンがサンギル諸島と婚姻関係を結ぶようになった、というイスラーム社会間での同盟関係成立を指摘する。この指摘は、国という枠を取り払うことで可能となった新しい視点といえる。

第4章では、「海の領主」として絶大な権力を握っていたマギンダナオ王国が、ヨーロッパの列強との戦いにより制海権を奪われ、権力基盤であった外国貿易が衰退し、政治的・経済的に弱体化していった経緯を描いている。スルトンの権威が低下すると見るやいなや、かつて労働力源であった周辺民族はその下を去り、スルタンは政治的な求心性を生み出すことができなくなっていく。事実上、名目的な存在へと低下したスルタン制「国家」は、20世紀に入ってから、米国によるフィリピン植民地支配により、国家の周縁に位置付けられた。その結果が、政治的・経済的な弱者への転換、すなわちマイノリティ化である。

第5章では、ミンダナオ島のバゴボ社会について述べている。バゴボ社会はイスラーム化を受け入れることなく、今世紀までアニミズムを信奉してきた。そのため、マギンダナオ王国やサンギル小王国のように、高度な政治組織も形成することなく、首長による支配を持続してきた。ここでは、バゴボ社会がイスラーム教、スペイン人、米国、日本とこれまで幾度となく外部からもたらされた影響によって翻弄されてきた結果、生態系の変化に伴う経済生活の悪化、米国による植民地支配による首狩りなどの伝統的な慣習的行為の禁止により、戦士社会を支えてき

た規範が揺らぎ、民族としての誇りを体感する場が奪われていくことになった、と指摘する。以上のことから、バゴボ社会の人々の生活領域は、現金を中心とした現金経済、近代的な法概念の導入等によって強制的に捻じ曲げられ、自らが伝統的に有していた自立性を喪失することになった、と結論づけている。

Ⅲ 本書の特徴と若干のコメント

以上が本書の簡単な概略であるが、ここでは本書の特筆すべき点と評者からの若干のコメントを付記したい。まず本書の特色は、冒頭で述べているように、まず何よりも東南アジア東部の海域イスラーム社会を1つの歴史的地理空間として措定し、史料と史料を組み合わせながら、その海域社会の全体像を描き出そうとするところにある。記述は陸地中心史観への批判から、海域社会に対する根拠なきロマンを求めてみたり、実証に基づかない想像力を挟み込まないように、抑えた筆致になっている。文献の中に埋もれて気付かないような時代を、文献により実証的に裏づけようとする努力は、敬服に値する。現在の東南アジアの歴史研究が到達すべき1つの水準を示しているといえるだろう。

さらに本書には一般の歴史書には見られない工夫、すなわち第Ⅰ部と第Ⅱ部の間にインターロード（幕間）として、18世紀から19世紀にかけて記述された漂流記や紀行文といった歴史小説の断片が掲載されている。その理由を、著者は「学術書より歴史小説のほうが、生き生きと読者に伝えることができる」（91ページ）と述べている。引用文の下には著者の解説が付き、事実関係を理解するための手引きとなっている。正直に言って、このインターロードによって、本書全体が若干読みにくくなったという点は否定できない。しかし本書を「新しい記述への挑戦」と位置付け、国別史の中で分断され、文字をもって自らを語ることを選択しなかった民族と地域を再構成するための試みとするなら、歴史小説のような記述を取り込むことで、議論全体が豊かな効果があると感じずにはいられない。

さて、ここからは評者のコメントに移りたい。まず第1は、本書の全体を貫く仮説——東南アジア東部の海域イスラーム社会を1つの独立した歴史的な空間として括ることが適当であり、イスラーム化しながらも、首長制が連綿と命脈を保っている——という点である。首長制がイスラーム化という影響にもかかわらず、土着の構造として維持されていることは理解できる。一方、著者は東南アジア東部の海域イスラーム社会に見る特徴を「同じ歴史文化的価値観を共有するひとつの世界」（7ページ）、「宗教の違いを超えた共通の文化・認識」（33ページ）を持つ地域とも、述べている。この宗教の違いを超えた文化的共通性とは、果たして、首長制のことを指しているのか、非常に不明確である。察するにこの不明確さは、首長制の厳密な定義と、共通の価値観や認識の内実に関する補足説明が、それぞれなされていないことに起因するよう思われる。確かに、序章において、首長制に関する項を設けて、首長制社会の特徴は言及されているが、分析上の定義は見当たらない。序章にあるように、「どのような過程を経て首長制社会から王国を形成し、王国成立後の首長と王の関係や首長制社会の変容はどのようなものであったのか考えることが重要になる」（3ページ）とするなら、厳密に政治的な体制として首長制と王国の違いを定義する必要がある、と考える。

第2は上記ともかかわるが、イスラーム化それ自体は首長制の論理を超える新しい社会結合原理を生み出すことはなかったとある。そうだとするなら、基層に普遍的なものとして土着の首長制がありながら、マギンダナオ王国、サンギル小王国、バゴボ社会のように異なる政治的な発展をどのように説明できるだろうか、ということである。同じような歴史的地理環境にありながら、ある社会がイスラームを受容し、スペインやオランダと伍していくだけの軍事力と政治力を持つ一方、バゴボ社会はそうした影響と接点がありながらも、それに適応することなく首長制を維持した。この違いは、どこに求められるのであろうか。またこれは、当該社会の「内的要求」（69ページ）の有無によって説明されるのであろうか。「内的要求」とは一体何であり、内的要求の差異は何

によって規定されるのであろうか、非常に気になる点である。

第3は、イスラーム化の受容過程についてである。イスラーム化が既存の社会を発展的に解消させ、新しい政治的・社会的結合を生み出す契機にはならなかったとある。このことは、基層にある土着の構造が強靱であり、外来思想であるイスラーム教も基層社会によって再解釈されて、従来の構造に適合するように包摂されてしまった、ということの意味するのであろうか。例えば、フィリピンにおけるキリスト教の受容については、外来宗教が土着宗教に適應する形で、翻訳されながら受容されたとの指摘がなされているが、このイスラーム教の受容は、東南アジアにおける普遍宗教（ヒンドゥー教、キリスト教）と比較すると、どのような特徴を見出せるのか、という比較論的な視点からの言及がわずかでもあった。

最後に2点、注文を述べたい。第3章において、王統系譜や伝承などの口伝史料が使用されている。今日、語りという行為に注目し、その政治性に着目する歴史研究が多く見られるなか、著者は「口伝史料は、文献史料を補うものでもなければ比較の対象でもなく、海域世界の論理そのものを理解するために不可欠のものとして、文献史料とは違った次元の重要性をもつ」（73ページ）という非常に興味深い指摘を行っている。しかし、それがどのような次元で

の、どのような重要性を持つものか、残念ながらまったく言及は見られない。文字によらない海域社会においては、語りの意味と力は陸地と大きく異なるものがあると思われる。それゆえに口伝史料の重要性について、もう少し親切な解説が欲しかったところではないだろうか。

同じく第3章において、小王国の成り立ちが王統系譜によって裏づけられている。しかしながら、系譜のタイトルのみしか提示されていないため、王国の成立が読み手には少々分かりにくく不親切である。確かに、第4章付録2で系譜が記載されているが、やはり本論にこそ、どのような文体で王統系譜が語られるのか、それをどのように解説すべきか、丁寧に記すべきではなかったかと思う。

とはいえ、上記の問題点は、決して本書の持つ研究上の意義を揺るがすものではない。著者が本書を通して示した、国を単位として歴史を語ることの矛盾に気づき、それを自らの問題として捉え、従来の文献史学を乗り越えていこうとする姿勢には、見習うべき点が多い。その意味で本書は、従来の歴史学を脱構築し、それまでの姿を内省し、グローバル化した時代に適合する新しい記述を真摯に模索しようとした、歴史家によるマニフェストといえるだろう。

（筑波大学大学院人文社会科学専任講師）